

小学校〈事後報告〉

単元名：ディスクゲーム・長なわひょうたんとび

授業者：齋藤直人 学習者：小学校3部4年29名（男子14名・女子15名）

1 公開授業の概要

今年度の研究テーマに即して、「ディスクゲーム」を行った。（普段の授業と同様に組み合わせ単元で「長なわ（体づくり運動）」も行ったが、研究のテーマとは別教材なので詳細は割愛。）

「ゴール型の運動特性」について

小学校段階ではゲームに積極的にかかわろうとしない子（いわゆる“お客さん”）がいないようにすることが大切である。そのためには、全員が「どのように動けばいいのか」を考え、理解し、何度もトライできるような教材を選択し、授業を進めていく必要がある。それを実現させるために、攻守の切り替え（トランジッション）がないルールにした。攻守分離型にし、ルールをシンプルにした上で、学習させたい内容を表れやすくする。そうすることで、夢中になって取り組みながら、学習させたい内容（子どもたちにとっても必要な知識や感覚）に迫っていく授業を展開した。

「自由と規律」について

夢中になって勝敗を争えば、どうしても興奮状態になりやすい。それを理解した上で、どのような態度や言動をすれば良いのかを考えさせるのが大切である。対戦しているチーム同士のセルフジャッジにすることで、勝敗を受け入れたり、仲間を認めたりする必要感が生まれる。

「夢中になって取り組む姿（いわゆる自由の部分）」と「相手の立場になって取り組む姿（いわゆる規律の部分）」の両方が出てくるような授業を展開した。

2 公開授業を振り返って

当日は、3分ハーフで3試合行った。最初の試合はコートが広すぎて、子どもたちの動きが停滞してしまったので、急遽、コートのサイズを変更した。2試合目以降は、スムーズに攻撃が展開する場面が増え、得点シーンも見られるようになった。そんな中でも、得点ゾーンの近くまでディスクを運びながらも、ゴールにつながるパスが出せずに停滞してしまうシーンを見取った。そこで、2試合目終了後に全体での認知学習場面を設定した。そこで、ディスク保持者に近づいてパスをもらおう動き、遠くのスペースに移動してパスをもらおうとする動きを確認した。その中で、1点ゾーンと2点ゾーンの使い方についてもアイデアが出された。その後の3試合目では、学習した動きを使おうとする姿があった。

3 研究協議

①上記の授業の意図・全体像を説明した上でフロアとの質疑・応答を行った。そこでは、ディスクにした意味、ディスクを落としてもよいというルールへの懸念、単元1時間目との動きの比較などについて意見交換が行われた。シンプルなルールや場の設定でありながら、プレイの選択（パスコース）の幅があることや学習の焦点化への肯定的な意見が出た

②自由と規律の部分に関しては、校種によつての違いはあるものの、各年代で学んだこと・経験したことが発揮されていた。ゴール型の運動特性は、種目固有の動きはあるものの「ボールをもらうには、ボールを運ぶには」どうすれば良いのかという課題を焦点化しながら授業が展開された。小学校授業では、全員が単元を通してゴール場面にかかわることができた。また、単元が進むごとにゴールに場面にかかわる児童が増えていったことから、ゲームの中で「どのように動けばいいのか」の理解が深まり、プレイが豊かになったと言える。（齋藤 直人）

中学校〈事後報告〉

単元名：球技「サッカー」

授業者：秋山和輝 学習者：中学1年生41名（男子20名・女子21名）

1. 公開授業の概要 「ゴール型－運動特性を学びながら、体育を通して“自由と規律”を考える－」の考え方

本単元における「自由」と「規律」の位置づけは各授業と単元に存在する。授業を成立させるためには学習規律が存在する。「規律」を保つためには授業最初のオリエンテーションが重要である。オリエンテーションでは単元目標や学び方、フェアプレイ、授業で求める望ましい姿について生徒と共通理解を図った。またゲームの「規律」を保つには生徒ひとり一人が素晴らしいスポーツマンシップを持たなければいけない。公正・公平のもと互いの健闘を讃え合い、素晴らしいプレイには歓声が生まれ、敵味方関係なく賞賛できるゲームは「規律」が保たれているだけではなく、生涯を通してスポーツに親しむ資質の育成に寄与すると考える。

単元中の「自由」とは生徒たちがチーム名やスローガン、セレモニーの内容などを自ら決めていく過程を指す。クライマックスイベントであるリーグ戦の運営（記録の保持や審判など）は生徒の主体性を尊重した表われと言える。ただし、生徒の「自由」はあくまで教師の「規律」の基に存在すること考えると教師の事前指導や綿密な指導方略、指導言語、教師行動の検討が重要になることは言うまでもない。プレイ面に関してはサッカーという種目特性上、いつでも（タイミング）、どこでも（場所）、何度でも（頻度）パスやドリブル、シュートといった技能を発揮することができる場面は自由度が高い活動であると考えられる。

2. 公開授業を振り返って

1) 本時の目標

- ・ボールを持たないときに守備者のいない位置に動くことができる（知識及び技能）。
- ・ゲーム中のチームの課題を発見しようとしている（思考力、判断力、表現力）。
- ・フェアなプレイを守ろうとしている（学びに向かう力、人間性等）。
- ・主体的にゲームの運営を積極的に行おうとしている（学びに向かう力、人間性等）。

2) 授業展開（実際の様子）

授業展開としては授業目標を確認後、それぞれのグループでランニング、体操の順番でウォーミングアップとドリル練習（ドリブル&パス、シュート練習）を行った。その後は保健体育科係生徒の司会のもとオープニングセレモニーが行われた。キャプテン生徒が考えた選手宣誓や保健体育係からの各チームへのエールなど生徒たちで工夫したセレモニーは終始和やかな雰囲気で行われた。

リーグ戦は男女別で4対4で行われた。試合前にチーム全員で円陣を行い、士気が高まった状態で試合に臨んだ。互いに健闘を讃え合うために試合の挨拶後には握手が行われ、フェアプレイを意識した様子が見られた。しかし単元を通してボールを持たないときの動きを指導してきたが、実際のゲームは団子状態であったことは課題として挙げられる。まとめの時間ではチームごとに現在の課題を確認し、全体でも共有を図った。本授業は生徒の主体的な活動の支援者として教師が位置づき、生徒の中心的活動から「自由」と「規律」を参観できた実践と言える。

3. 研究協議① 概要

研究授業だけでは伝わりにくい単元を通しての様子や実際の指導場面の映像の共有、さらには授業づくりの視点など参観者のさらなる理解を促すために資料が共有された。単元を通して実質的ゲーム参加を保障するためにゲームを意識したボール操作技能の習得や修正されたゲームとセットにした発問の設定など意図的、計画的な指導場面が見られた。

4. 研究協議② 総括

ご参観いただいた先生方と中学生のサッカー単元における「自由」と「規律」に関して考える機会となった。本実践を踏まえて、今後さらにどのような自由と規律を保障できるのか今後検討していく必要がある。

高等学校〈事後報告〉

単元名：球技「ラグビー」

授業者：松本英樹 学習者：高校2年生男子（39名）※当日は部活動の大会等で欠席した生徒が数名いる

1. 公開授業の概要

ラグビー単元の限られた授業数の中で、“何をどのように教えるのか”最初に選択した考え（安全上の配慮）は、「ゲーム中に激しくなるコンタクトプレーは取り入れない（タックルだけでなくホールドも禁止）」「練習でもスクラムの押し合いはさせない（少人数で首を組み合うことも禁止）」である。ただし、タックルやスクラムがどのようなプレーであるのか「切り取ってでも体験はさせたい」と考えた。歩くスピードで組むモールやラック、リフトしないラインアウト、多様なキックでのスペースへの攻め合い、ノックオンやスローフォワードなどの基本的な反則、そして“肝”とも言えるオフサイドのルールを入れ込んで「筑附式（松本 ver.）タッチラグビー」を整理した。今回のラグビー単元は、ゲームの修正にこだわって作成したこのタッチラグビーから逆算した授業運営をおこなっている。ラグビー教材を研究する中で、よく見聞きした言葉が「自由」と「規律」である。公開授業は7回目（全13回）にあたり、「1対1における攻防や2対2の場面で数的有利な状況を作り出してトライを取る方法」「ディフェンスの方法やオフサイドラインを守る必要性」などを学習しながら、ラグビーにおける自由や規律について考えることができるように構成している。

2. 公開授業を振り返って

公開授業では、授業者のこだわりである「学習規律の保ち方」「教員のリードによる準備運動で導入から展開へ勢いをつける」「高校生段階に求める1時間あたりの運動量×学習量」なども観ていただいた。「1対1におけるトライの取り方や2対2でどのように数的優位を作るのか」については、ゲーム局面やトライゾーンの広さを意識した攻撃ができるように指導した。筑附式タッチラグビーのルール説明では、ディフェンスラインを作る（オフサイドポジションでプレーしない）ことやセルフジャッジについて体験しながら理解できるように指導した。グループでの学習が中心であり、授業者の意図するポイントについて話し合いや教え合いが活発におこなわれていた。その結果、プレーに工夫が生まれている場面を多々観察することができたので、授業目標に対して一定の評価をしている。

3. 研究協議Ⅰ

研究協議前半（高校の発表部分）におけるスライド構成は次の通りである。①高校生段階に望まれるゲームから逆算した授業運営、②ゲームの修正：「筑附式タッチラグビー」のルール、③ラグビー単元の概要（全13回）、④座学：教室体育の内容、⑤安全への配慮、⑥学習指導と生徒指導の一体化、⑦公開授業のふりかえり（指導案の解説）、⑧今後のラグビー授業の展開、⑨ラグビー授業を通して“自由と規律”を考える（まとめ）※担当時間20分のほとんどを発表に費やしてしまい、ここでの質疑応答は少ししかできなかった。

4. 研究協議Ⅱ（まとめ）

研究協議後半では、小・中・高校の授業者3名による相互の意見交換を聴いていただいた後に、研究協議Ⅰの内容も含め全体での質疑応答となった。その一部において児童生徒によるセルフジャッジが話題になった。高校のラグビー授業では、基本的にセルフジャッジを採用している。勝敗にこだわることは大切だが、常に、“それ以上に大切なこと”を見失わないようにさせたいと考えている。附属小～附属中の授業においても、そのような“大切なこと”が守られている＝育まれている場面を観ることができて、縦のつながりを感じた。

「自由」と「規律」についての定義は難しい。が、授業者の経験や教材研究等から導き出した「自由」や「規律」を授業内に落とし込んで、本年度の研究テーマに沿った授業を実践してきた（つもりである）。本年度のラグビー授業の取り組み（全体像）については、本校の研究紀要にまとめている。